ラグビーW杯2003

その六　running handling game

現代ラグビーの進化はrunning handling gameとして著しいものがあります。ルールの改正もプレーに生かすべく、また生かされるべく進行しています。handling playがプレーを継続し、ラグビーを非常に面白いものにしています。究極のところでボール手放した後、つながらない場面がありましたが、意図と平素実行している証拠として興味深く見ました。タックル後のパスや、身体から放してボールを置く動作も普通のこととなってきました。それらから日本の進むべき道を学ばねばなりません。

ラグビーは激突又激突の格闘技という概念が先行しています。確かに激しくぶつかりますが、全体的に考えますと、ボールを手で扱いつつ前進しトライを取り合う競技です。フットボールでボールを持って走るという光輝ある反則から生まれ、時を経てhandling gameとして生成発展の一途をとげてきました。ルールもその方向で整備されてきました。現代ラグビーの進化は、この10年ほどルール改正ともに一段と加速されました。

ボールを手で扱うのは、パスだけではありません。地上に置いたり、そのボールを押したり、手から手へ手渡したりいろいろあります。パントも足で行うパスと考えて活用されています。そのようなルールの研究とプレーの推進の後進性が、日本のラグビーが周回遅れしている最大原因なのです。

前のW杯でマッコーミック主将が「サイズよりタフ」という言葉を残しましたが、タフであるためには、フィットネスだけでなく、handling で動き回り途切れないラグビーをしないと終始走り切れるプレーヤーが育たないのです。セットプレーはまだしも、継続しステレオタイプになったら付いていけないのです。日本ラグビーのレベルアップの第一条件は、running handling game の認識を改め、handling rugby へ徹底的にプレーの本質を改革することです。

そうすることは、ラグビーをもっともっと多くの人が身近かなスポーツとして感じ興味をもつことになり、ラグビー人口の増加に繋がり、ラグビー人気復活にもなるのです。

2004.01.11
西川　義行